
仰せのままに、御主人様

空色小鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仰せのままに、御主人様

【NZコード】

N7972D

【作者名】

空色小鳥

【あらすじ】

商家を営んでいた両親の突然の死により、残されたのは一人娘のマデーラと唯一の使用人ヴェネフ。世間知らずな『お嬢様』は、国に没収されてしまった店を取り戻すと言い出すけれど…？『天上の国』と同じ世界を舞台にした凸凹主従の商人FT。

ティガル＝フェンデといふ名を知る者は少ない。だがその名を知らぬとも、『貿易王』といふ通り名は、彼が死してなお、今の地上で知らぬ者はいないだらう。彼は全ての海を制覇し、一代で一国の王すら凌ぐ財を為したという武勇伝中の人である。

+++

「だからね、このまま終わつたらいけないとと思うの」何をどうしたら『だからね』に繋がるのかわからない流れで、彼の仕える『お嬢様』は唐突に言い放つた。

脈絡のない会話は十代の少女にとつてはお手の物だらうが、来年二十を迎える予定の彼には理解困難である。

仕方なく、彼 ヴェネフ＝ニル＝イ＝アロドットは口を開いた。

「お嬢様、私には今のこの状況でその一言が出る理由がわかりませんが」

場所は船着場だった。

荒くれた海の男達が闊歩し、強い潮の香りに満ちた外海への玄関口である。ざざーんと打ち寄せる波の音が、向き合つ二人の間を通り過ぎては消えて行く。

彼等はどちらも白い服を身につけていた。

飾り気のないそれは、喪に服している事を示す。まさについ先程、二人は葬儀を終えてきたばかりだつた。

「いやね、わからぬの？」 ヴェネフ

葬儀の為に結い上げていた銅色の巻きの強い髪をばさりと解きながら、お嬢様 マテーラ＝フェンデは形の良い唇を拗ねたよう

に尖らせた。

「父様も母様も死んでしまって、わたし達、下手したら路頭に迷うのよ」

「そうですね」

それは間違いようのない事実だつた。

三日前の嵐で、商談の為に外海に出ていたマーテーラの両親は、乗つていた船ごと荒波に飲まれて海の藻屑もくすと化したのだ。

海で商人が死んだ場合、大抵は死体が上がらない事を理由に、葬儀は海の上　水葬で執り行われる。実に商人らしいとも言える、

合理的な方法である。

マーテーラには身近に両親以外の血縁はなかつたし、商人とは言つてもほとんど身内だけで回していたような零細振りれいさいで、正式な使用者はヴェネフ唯一人という有様だ。

母方の親戚はいなもの、父方ならば幾人かはいるはずなのだが、それぞれが大陸中に散つていて、今では何処にいるのかも生きているのかさえ定かではないらしい。

店の実質的な権利者であつた両親を共に失い、頼れる血縁者もない状況で、現在十三歳で成人に満たないマーテーラではその後を継ぐ事も維持も出来ない。

僅かばかりに残された財産も、これから増やせなければ減る一方。明日の食事にも困るようになる日は近い。

「『だから』、終われないって言つてるんじゃない」

言わんとする所は理解出来たが、重要な部分を端折はしょられてはわからりたくてもわかるはずがない。

心の底から突つ込みたかったが、ヴェネフは良く出来た使用人だったでの我慢した。

「わたしは『貿易王』の孫よ。こんな所で路頭に迷う訳には行かないわ！」

その宣言は実に雄々しかつたが、具体的な方策があるとは思えない状況ではただの大口である。

マデーラの言う通り、元を辿れば確かにマデーラは世界に名を響かせた『貿易王』ティガルの孫にあたる。

が、かつて一国の王すら凌ぐと言われた財はすでに過去のもので、ティガルの子供達は凡人の域を出なかつた。

否、彼等を弁護するならば、ティガルの才覚が人並み外れていたのだ。

ティガルの死後、その財は子供達に分配されたが、その後に世界全土を巻き込む戦争が起こり、マデーラの父が受け継いだ物の大半は灰と化したり、戦火を避けての逃亡の間に散り散りになつてしまつた。

戦いが何とか平定した今も、落ち着いた先であるこの国は、現王と前王弟の間で王位継承を巡つて何かと大きな臭い話題が尽きない。戦乱を生き延び、小さくとも店が残つただけでも幸いなのだ。もつとも、近い内にその店の権利は国に没収されてしまう事が決定しているけれども。

「それでお嬢様。これからどうするつもりですか？」

尋ねると、琥珀の瞳がヴェネフの浅黒い顔を見上げた。釣り目氣味だが年の割りに整つた顔が、にっこりと不吉な笑顔を浮かべる。マデーラがこういう『いい笑顔』を浮かべている時は、大抵ろくな事を考えていない。

今からでも遅くはない、解雇を求めるべきかも。

そんな事をヴェネフが考えている事に気付いているのかいないのか、マデーラはしつかとヴェネフの服の裾を掴んでから言った。

「決まつているわ、わたし達の手で店を取り戻すのよ！」

わたし達、の中にヴェネフは当然のように含まれている。

マデーラの手元に残つた物は、身の回りの品と両親の残した僅かばかりの遺産、そしてたつた一人の使用人であるヴェネフ。

無謀にして果敢な少女は、それだけで国に没収される店を取り戻そうと言つのだ。

未成年である事は時間が解決してくれるが、一度國のものとなつ

てしまつた権利を再び取り戻すのは言う程簡単な事ではない。

内乱の気配漂う今、少しでも資金を欲する国はすぐに権利を売り出すだろうし、その場合は国から買い取つた人間から、店と土地の権利を買い取り、さらに商人として商う許可を国から得なければならぬのだ。

すなわち、物を言うのは『金』である。

「お嬢様、自分がどれだけ無茶を言つているかわかつてます?」

無駄だとわかりつつも確認すると、マデーラは当然とばかりに発展途上の胸を張る。

「人間、目標が高いほど燃えるわよね!」

絶対にわかつてない。

だがヴェネフは良く出来た使用者の上に分別ある大人だったので、世間知らずの子供の無謀さを賢しらに指摘する事はしなかつた。

彼の黒い瞳は諦めたように頭一つは小さい主人を見下ろした。

そう、本来の主人であるマデーラの父が亡くなつた今、彼の主人はこの少女なのだ。

海の照り返しを受けてきらきらと輝く期待に満ちた瞳を前に、他に何が言えただろう?

「…仰せのままに、御主人様^{マ・リスター}」

それが『貿易王』の孫・マデーラと、その使用者ヴェネフの新生活の始まりだった。

世界は三つの大陸と、一つの天空大陸から成り立っている。地上にある三つの大陸を、現在支配しているのは四つの国。

もつとも大きな中央大陸の北にスタラ、南にレサイア。その北東にある大陸にベネディス、最も南にある大陸にエラシッド。店を國に没収されたマーテーラ達が現在暮らしているのは、その内のスタラと呼ばれる國にある小さな港町、ミオツサだ。

縦に長い中央大陸の北半分を支配しているので、北方は冬になると極寒の地だが、南のレサイア寄りにあるミオツサは冬でも多少は過ごしやすい。

「過ごしやすいが、『寒くない』とは同意ではないとしみじみヴェネフは思う。

「ヴェネフ、何なのその格好？」

着込めるだけ着込んだヴェネフの姿に、マーテーラは呆れた声をあげる。そう言うマーテーラは少し厚めの生地で仕立てたダークグリーンの普段着一枚だ。

一応汚れないように、服の上にエプロンをかけているが、防寒に役立つ訳もなく、いくら室内でもその薄着は見ている方が寒い。

「…お許しを。寒さだけは本当に弱いんです」

その言葉に嘘はない。

「ヴェネフはエラシアンだものね。でも、やっぱりその格好は変よ？」

毎年の事なのでマーテーラもわかつてはいるのだろうが、つい言いたくなるらしい。

ヴェネフの生まれは南方大陸 現在、エラシッドによつて統治されている場所だ。

黒い髪と瞳、浅黒い肌の彼等は非常に勤勉で身体能力が高く、物覚えも良いとされ、昔から世界各地で使用人として重用されてきた

歴史がある。

フェンデ家に彼が仕えるようになったのも、すでに亡くなつた彼の父が『貿易王』に金銭では返せない恩があり、息子へ奉公で返せと遺言したからだ。

多分素直にその遺言を聞く必要はなかつただろうが、当時、今のマデーラよりも幼かつたヴェネフには他に行き場がなかつた。

口約束でしかない遺言だけを胸に、一人やつて来たヴェネフをマデーラの父、ユーディンは暖かく迎えてくれ 現在に至る。（…あの頃は素直でかわいらしかつたのに、どうしてこんなにたくましくなつたのですかね……？）

すでに店は国に下調べという名目で押さえられてしまつた為、急遽借りた小さな家の床を簾で掃きながら、ヴェネフは心の中で嘆息する。月日というものは残酷だ。

ヴェネフが使用人となつた時、マデーラは五歳。

兄弟がいなかつたせいかすぐに懐き、それなりに多忙な両親に代わつて、ヴェネフはずつと子守役だつた。

そんな彼の後を追いかけていた少女が、今では彼の主人なのだ。世の不条理を思わずにはいられない。

「じゃあ、ヴェネフは残りの掃除と留守番をお願いね」「

先程まで危なつかしい手つきで、ヴェネフ同様に掃除をしてはずなのに、マデーラはいつの間にか外套を片手に出かける準備を整えて戸口に立つてゐる。

この寒い中、わざわざ外に出かける気はなかつたが、そうですかと受け入れられる話ではない。我に返つたヴェネフは慌てた。

「ど、何処へ行く気ですか、お嬢様！！」

「何処つて決まつてゐるでしょ。そろそろお昼よ？」

言われて見れば確かに、そろそろ昼食時だ。

葬儀は朝早くから、そのままこの家に来て掃除をしていたので、だがしかし、たとえ主人だろうと簡単に財布を任せた訳には行か

ない。

ただでさえ今までろくに買出しなどした事がないのだ。値切るなんて芸当は期待出来ない。

「買出しでしたら私が行きます。お嬢様では足元を見られるのがオチです」

「失礼ね！」

ふう、と頬を不満気に膨らませる様子は小さな頃と変わらない。だが、その仕草を微笑ましく感じられるような状況ではなかつた。ここで主張しておかねば、本当に二人揃つて路頭に迷う。

「失礼と言つたが、事実でしょう。お嬢様は接客の経験はあつても、金銭の取り扱いはまだ許されていなかつたじゃないですか」痛い所を突かれたのか、マデーラはぐつと言葉に詰まる。けれどその程度で押し負けるような性格ではなかつた。

「父様も母様も心配のし過ぎだつたのよ。わたし、これでも算術は得意だし、お金の計算を間違うほどかじやないわ！」

「…旦那様と奥様が心配したのはそこじやありませんよ」

マデーラが同じ年頃の少女より頭の回転が良く、算術が得意とうのは確かだが、それだけで商売が出来れば何の苦労もない。

「まずは人を見る目と、駆け引きを身につけさせようととなさつたんです。商売の基本ですよ」

商人はお人好しでは商売にならない。

顧客を満足させながらも、自分に益をどれだけ得るかが重要であり、商人としての腕の見せ所だ。

それにはまず多くの人に接し、様々な人々に適した対応を自分なりに見つけなければならぬ、とはマデーラの父・コーディンの口癖だつた。

商人としての才覚は父であるティガルの足元に及ばずとも、その息子であるコーディンはやはり根っからの商人だつたのだ。

マデーラは良くも悪くも真っ直ぐだ。

マデーラは良いから人の信用を勝ち取りやすいが、同時に相手の裏を読

む事には長けていない。つまり、騙されやすいのだ。

これでは子供の頃のみならず、一人前の『商人』になるまでお守り役をする羽目になりそうである。

亡きヨーティンが、マーテーラに教わらない教育を使用人のはずのヴェネフに対しても施したのは、もしかするとこんな状況を見越してのものだったのだろうか。

ふとそんな事を勘ぐってしまい、ヴェネフは少し鬱に入った。

「ねえ、ヴェネフ」

ヴェネフの言葉に思う所があつたのか、考え込んでいたマーテーラが口を開いた。

何かと思う前に、その手が動いてヴェネフの手にあつた箋を取り上げてしまう。

「お嬢様？」

「確かにわたしは商人に必要な駆け引きとかには慣れてないわ。でもお腹が空いたの。この家にはまだ食べ物なんて何も置いてないんだから、買って来ないとならないと思うのよ」

「それはそうですが……」

「でしょ?」

マーテーラの言葉も間違つてはいけないが、やはりマーテーラに買い物を任せるのは少々不安だ。

その不安を見透かしたように、マーテーラは続けた。

「だったら、ヴェネフも一緒に出かけましょうよ。それなら安心ですよ?」

そして止めとばかりににっこりと笑う。

ヴェネフはその顔を呆然と見つめ、次に窓の外の今にも雪が降りそうな寒空に目を向け、再びマーテーラに顔を戻した。

ただでさえ冬の港は凍えるように寒く、流石に喪服の上にぐるぐる着込む訳にも行かずにはいたすら耐えた後だ。

ようやく人心地ついたばかりと言うのに、また寒空の下に出かけようと言うのか。なんという無体な仕打ちだ。血の通つた人間の行い

とはとても思えない。

けれどヴェネフは良く出来た使用人の上に分別ある大人で、ついでに忍耐強かつたので幼い主人に逆らうような事は出来なかつた。

「…仰せのままに、御主人様^{マ・リスター}」

悲壯な覚悟で承諾する彼に、マデーラは満足したように頷き、実際に楽しそうな様子で彼の手を取つて扉を開く。

途端に容赦なく吹き付ける寒風に彼の目で涙が光つたが、そんな彼に同情してくれる人は当然ながら誰もいなかつた。

今までほんと来た事がなかつた市場は、マテーラにては物珍しいものばかりだつたらしい。

「ねえねえ、あれは何！？」

「今すれ違つた人、見た事もない服を着ていたわ。何処の国の人かしら？」

「あの青い果物、食べられるの？」

：などなど。

好奇心を剥き出しにして、僅かな距離を進む間に矢継ぎ早に質問が飛んで来る。

「あれは薬草用の石臼ですよ」

「あの服装は確か何処かの山岳部族のものだつたと思ひます」

「あれはそのまま食べると恐ろしく苦いです。加工しないと食べられません」

その質問に律儀に答えつつ、ヴェネフは周囲を見回した。

流石に昼時は人が多い。

一人のようによく食事を買つに来た人間も多いだろうが、店の性質によつては昼前に閉めてしまう事もある為、今時分が一番混み合つ。

あまり人が多いとゆつくり見ても回れないし、特に食料品関係の店はこの時間は大盛況だ。場合によつては交渉などもろくに出来ない可能性がある。

その事もあつて、もう少し人が落ち着く遅い時間に来るつもりだつたのだが――ここまで来てしまつたら、とつとと用事を片付けてこんな寒い場所とはおさらばするに限る。

周囲の人々の倍は着込んで見るからに着膨れているヴェネフを、時折何事かと視線を向けてくる人間もたまにいるが、すでにそつた目には慣れてしまった。

だが、ふとそれとは微妙に違う視線を感じて傍らを見ると、しつかりヴェネフの服の裾を握つた状態でマデーラがじつと彼を見上げている。

「…どうしました、お嬢様」

また何か気になるものを見つけたのかと思いきや、マデーラは彼から視線を反らさずに口を開いた。

「ヴェネフは物知りね。何でそんなにいろいろ知ってるの？」

少しむくれたような言葉に、思わず苦笑する。

「物知りなんて言える程度の知識ではありませんよ。この国に来てからはこの街からほとんど出ていませんしね。…市場には旦那様の御供でよく来ていましたし、旦那様や奥様から頼まれて買出しもたまにやっていましたから」

はつきり言つてしまえば、マデーラが世間知らずなだけである。普通の一般庶民なら市場で買い物など子供の頃に普通にやつても不思議ではないばかりか、農家の生まれだつたりすれば親の手伝いで店頭に立つてしたりする。

流石に面と向かってそんな事は言えないが、自分でもそう感じたのか、マデーラの表情が目に見えて暗くなる。

もしかして落ち込んでしまつただろうか。

少し心配になつたが、よもやこの程度で落ち込むとは思わなかつたので、どう慰めればいいやらわからない。思春期の女の子は複雑怪奇だ。

やがてマデーラは小さくため息をつくと、ぽつりと呟いた。

「…？」

相変わらず重要な部分が端折^{はなぶ}られている気がする。

だが、取りあえず浮上してくれるのならありがたい。ヴェネフは

これ幸いと、裾を掴むマテーラの手を取つた。

長身の部類に入るヴェネフとまだ成長期に入つたばかりのマテーラでは、身長差がある為、裾を掴まれると後ろに引っ張られる形になつて歩きにくい。

何より引っ張られた部分に風が入ると寒さ倍増だ。先程からどうにかして改善出来ないだろうかと思っていたのだ。

かと言つて、この人ごみではぐれられても困る。そう思つての行為だったのだが、何故かマテーラは驚いたように目を丸くした。

「ほら、お嬢様。ここでずっと立つていたら通行人の邪魔になりますよ？ 取りあえず動きましょ！」

「え、あ…そ、そうね」

ヴェネフの言葉に対する返事も何処か動搖している…よつな？

ハテ、我ながら名案だと思つたのだが、何か変な事を言つただろうか。心の中で首を傾げながら、ヴェネフはマテーラの手を引きながら先に立つて歩き始めた。

手を引かれるままにマテーラは着いて来るが、先程までぽんぽん飛んできていた質問もなりを潜めてしまつた。…何だか不気味だ。歩きながらちらりと視線を向けると、マテーラは何処となく頬を赤らめ、恥ずかしそうな顔をしていた。

（…はつ！）

その様子でヴェネフは閃く。

（どうか、子供扱いされたと思つたのか！）

確かに今の状況は、大人が子供の手を引いているように見える。とても使用人が主人を案内している図には見えないだろう。

その事を差し引いても、子供扱いを嫌がる年頃なのだろうし、手を引かれる事を恥ずかしいと思つても不思議ではない。

思い返せば、今までマテーラに手を引かれる事はあっても、その逆はほとんどなかつた。…その必要がなかつたとも言つが。

まさか今更、手を繋ぐ行為自体を恥ずかしがる事もないだろう。新居から引っ張り出された時ですら、マテーラは彼の手を躊躇なく

掴んだのだから。

ようやく納得したヴェネフだが、だからと言つて手を離す訳にも行かず、取りあえず日ぼしい店まではそのまままでいる事にした。
「……あー……、お嬢様、昼食には何をお召し上がりになりたいですか？ そう言えばもう少し先に、旦那様もお好きだった腸詰の店がありますね。行ってみますか？」

何となく落ち着けずに話題を振ると、マデーラは先程までの恥じらいは何処へやら、何故か少し怒ったような目で睨んできた。

「お嬢様？」

ハテ、腸詰はお気に召さなかつたのだろうか。日持ちもするし、何より値段も手頃なので個人的にはお勧めなのが。

マデーラの反応にヴェネフは再び心の中で首を傾げた。

その店の主人はヴェネフと同じエラシアンで、作る腸詰も南方大陸風である。

他の店より少々香辛料がきつめに作られているそれを、確かにマデーラも嫌いではなかつたはずだ。

何が気に食わないのだろうと不思議がるヴェネフを前に、マデーラはようやく口を開いた。

「期待したわたしがばかだったわ……」

しかし、ぼそりと呟かれた言葉は、人々のざわめきに紛れて聞き取れなかつた。

「はい？ 今、何か？」

「べ、別に！ いいわよ、そこで…お腹も空いたし…」

「ではそれで、マ・リ・ス御主人様」

何だか自棄つぱちにも聞こえる返答に益々困惑しつつも、ヴェネフは頷いた。

忍耐強さにはそれなりに自信があるが、正直、この寒風に長時間吹かれているのは辛い。

新居の掃除もまだ途中だし、今日中にやるべき事はいくつもあるのだ。こんな所で無駄に時間を費やすのも勿体ない事だろう。

取りあえず当分必要な物を頭の中で思い浮かべ、これから立ち寄る店を決める。

折角の機会だから、今後の事も考えてマーティーに交渉させてみてもいいかもしない。何事も経験は大事だ。

そんな考えに没頭するヴェネフを、マーティーは呆れたように見上げ、小さく吐息を漏らしたが、彼はその事にまったく気付いてはいなかつた。

「 残念ながら、不合格ですね」
 ヴェネフの率直な感想に、マテーラがむつとした様子で顔を上げた。

「 何よ、ちゃんと値引きしてもらえたじゃない」

「 確かに値引きはして貰えたかもしませんがね……」

不満を隠さないマテーラに反論しつつ、ヴェネフはじつとマテーラを見つめる。いつもなら負けじとさらりに見返すマテーラだが、その視線が何か^{やま}疲しい事でもあるかのように僅かに泳いだ。

かつてユーディンも好きだった腸詰に、常備可能な野菜と調味料を必要最小限 その予定だったのに、マテーラの腕の中には紙袋に入った予定外の物体があった。

つややかな光を放つ赤い果物。その名は林檎。

「 …『 やあ、お嬢ちゃん可愛いねー。うちの林檎もほら、恥ずかしがつてこんなに赤いよー』 …でしたか?」

「 !」

ぼそりと棒読みでヴェネフが口にした言葉に、マテーラの肩がびくじと跳ねた。

「 だ、だだだ、だつて! 美味しそうだつたんだもの! ! !」

慌てた様子で必死に言い募るもの、その姿に今更ほどされるヴェネフではない。

「 はは、何も不味いとは申してませんよ? 見事な冬林檎です。きっととても美味しいでしょうね。…ですが、果物といつのはそもそも日持ちはしないですし、嗜好品ですから基本的に高価です。少々値引きしてもらつた所で、その一袋でこいつらの野菜が倍買えますよ?」

「 つづけ…」
 言葉による容赦ない追求に、マテーラはもはやそれ以上の言葉は

出なくなつたようだつた。

やれやれ、とため息をつきながらも、ヴェネフは頭の中で素早く計算する。

（若干予定外の出費ですが……林檎なら食材ですし、まあ、良しとしますか。これもお嬢様の『学習費』と思えば安いものですかね）

果物売りの呼び込みに引っかかっている事に、敢えて気付かなかつた振りをしていた事は秘密である。

長年の付き合いだ。マテーラが口で言つより、少々痛い目に遭つた方が覚えが良いのはすでに知つている。

がつくりと落ち込んだマテーラを他所に、ヴェネフはこつそり林檎の質を確かめた。

小振りだが色も形も申し分ない。寒風によつて届く香氣は甘く、程よく熟している事がうががえる。

（…ふむ、いい林檎だ）

ちなみに林檎はヴェネフも好物である。マテーラの手前、真面目さつた表情を保つっていたものの、ついつい口元が緩んでしまう。（品を見る目に関しては、血は争えないと言つべきですね）

幼少時にはまだからうじてティガルの残した品も残つていたそうだし、毎日品物に囲まれて育つた身だ。『良い物』に対する目が無自覚の内に養われたのだろう。

腸詰は同郷のよしみと、店主がお得意様だつたコーディンの訃報を聞いていた事でかなり安く売つて貰えた。

野菜もいくつかまとめて買いする事で多少は値引いて貰つ事に成功したし、後は調味料等だけである。

林檎分の出費を考えても、実際は赤字にはなつておらず黒字で收まつているのだが……ここは将来を考えて、あえて愛の鞭だ。

「…お嬢様、次はやつてみますか？」

しゅんとうなだれているマテーラにそつ持ちかけると、その顔がぱつと持ち上がつた。

「つ、次つて」

「もちろん、交渉ですよ」

ヴェネフの言葉にマテーラの田がきらりと光った。

「やるわー」

予想以上のやる気で、おやと驚く。

余程、先程の『不合格』といつ言葉が口惜しかったのだろうか。プライドの高いマテーラの事だから不思議ではないが

「後は何を買うの？」

「そうですね…塩は産地で基本価格がほぼ決まっていますし、交渉するならそれ以外の物になるでしょうね」

「それ以外…香辛料とか？」

「ええ、お嬢様が必要なら茶葉などでもいいですが」

「……」

香辛料も茶葉も、どちらも果物と変わらない嗜好品で、流通が下がる冬場はどこの中も価格が高めに設定してある。

値引き交渉としては果物より難易度は高い。それなりに家業を手伝っていたマテーラにもそれはわかっているだろう。

マテーラは少し考え込んだ。考え込みやがて再び持ち上がり

つた目には、何かを思いついた輝きが宿っていた。

「決めたわ、ヴェネフ」

「では何に？」

「茶葉にするわ。香辛料ほど専門的な知識がいらないものマテーラの言葉に間違いはなく、その選択は正しい。

香辛料は中央大陸の中央より以南でしか採れない植物が主だ。すなわち、ほぼ全てが陸か海を経由して輸入されてきた物だと言える。元々南方大陸の出身であるヴェネフならばさておき、スタラからほとんど出た事のないマテーラではその良し悪しを判断するのは難しいだろう。

だが、茶葉ならこのスタラでも栽培されているし、比較的日常的に口にする物だ。それに、元々マテーラの家でも取り扱っていた物

である。

「ならば、お手並み拝見致しましょう」

ヴェネフの言葉に、マデーラは不敵に微笑んだ。この様子だと、何か勝算でもあるのだろう。

目的が決まり共に茶葉の卸商に向かいながら、ヴェネフはそれにしても、と思う。

（何か企んだような顔が似合つてるのは、女の子としてどうなんですか…）

よく言えば小悪魔的のかもしないが、それなりに付き合いの長い身には魅力的には映らない。何しろ、大抵の場合そんな顔をされた後に困った事になるのはヴェネフだったのだ。

マデーラはまだ子供の分類を受ける年齢だが、すぐに年頃になるだろう。その時に困った事にならなければいいが

（…変な虫がつかないならそれに越した事はないとは思いますが、まったくつかないというのも…）

マデーラの両親が亡くなつた今、代りにマデーラの幸せを見届けるのは己の役目だとヴェネフは密かに思つていた。

便宜上、関係が雇用主と使用人なので表立つて『保護者』を気取るつもりはない。

だが、今まで『兄』代わりだった者として、マデーラ個人の幸せの為ならば可能な限りの助力を惜しまない心構えだ。

もつとも正直な所、今のマデーラを見ていて、その花嫁姿など想像も出来ないのだが。

そんな事を考へているなど思ひもしてないであろうマデーラは、黙つて僅か後ろを着いて来る。

ヴェネフにとつて理想の女性像は今は『きマデーラの母であり、ゴーディンの妻 リエナだ。

ヴェネフの目から見てリエナは、良妻賢母でしかも優しげな美貌を持つ、非の打ち所のない女性だつた。母代わりの存在でもあつたせいだらうが、その影響は大きい。

その血を引いているはずなのだが、マテーラは顔立ちこそリエナに似たものの、性格は見事に正反対だ。コーディンも穢やかな物腰の人だつたし、一体誰に似たのだろうかと常々思う。

コーディン曰く、マテーラは祖父である『貿易王』に気性が似ていると言つたが、ヴェネフがフェンデ家に来た時点ですでに故人となつていた人なので、眞偽のほどはわからない。

似ているからと言つて、同じように伝説に残るような商人になれる訳もないし、なれたとしても、女性としてそれは幸せなのだろうかとも思う。

ヴェネフとしてはもう少し女性らしい奥ゆかしさを身に着けて、人並みの幸せを見つけて欲しいのだが。

ちらりとマテーラに視線を落とし、また好奇心を隠さずに物珍しげに周囲を眺めている姿に心中でため息を着く。

普通こういうお年頃の女の子は、商売とか市場などではなく、恋とかお洒落とかに興味を持つものじゃないのか。

だが、思い返してもマテーラがそうしたものに夢中になつていた事は一度もなかつた気がする。

(…無理かも)

あの母を身近にして今まで身に着いてないものが、手本もないのにこれから身に着くとは到底思えず、ヴェネフはあっさりと投げた。世界は広い。多少がさつでも、家事も満足に出来なくて、女だてらに商人を志していようとも構わないと言える豪気な男が何処かに一人くらいはいるだろう。

ヴェネフはよく出来た使用者であるものの、自分に関する事は人並み外れて鈍感だったので、当然のようにその『一人』に自身を含まなかつた。

そのまま茶葉の卸商の元へ行くのかと思いきや、マデーラの主張により先に塩や砂糖を買う事になつた。

二人分なので多量ではないのだが、高張るしそれなりに重さがある為、出来れば最後に立ち寄りたかったのだが 理由があるのだと言われば使用人が主人に逆らえるはずもない。

荷物を抱えてようやく辿り着いた卸商の引き戸の中に入ると、しゅんしゅんと湯が沸く音と共に、仄かな温もりと何処か心安らぐ芳香に包まれた。

今までほんとどが露店だつただけに、その温もりに思わずため息が出そうになる。

そこに人の訪れに気付いたのか、奥にいた店の主人が顔を出した。「寒い所いらつしゃい。おや、もしかして… フェンデの嬢ちゃんかい？」

顔見知りだつたのかと、ヴェネフが意外に思つて横で、マデーラはにっこりと微笑む。

「こんにちは、アルボイさん」

「いやあ、大きくなつたねえ。びっくりしたよ。… じつちの兄さんは？」

「これはヴェネフよ。うちの使用人なの」

「…ああ！ あの！」

何だか物扱いされた上に、知らない人に『あの』と言われてしまつた。

おそらくマデーラ経由で何か話が伝わつてゐるようだが、一体何を吹き込まれてゐるのか知るのが怖い。

「…お嬢様、お知り合いなんですか？」

市場にはほとんど来た事がなかつたはずのマデーラの意外な人脈に、驚き半分怪訝な半分で尋ねれば、マデーラは澄ました顔で含み

笑いする。

知り合いなのは確かだが、どういう知り合いかは答える気がないらしい。

(…茶葉を選んだのはそういう事だったのか)

確かに顔見知りなら、値引き交渉もしやすいだろう。多少無茶を言つても、相手を怒らせてしまわない程度には親しそうである。

「嬢ちゃん、今日はどうしたんだい？」

密かに心配もしていたヴァネッサがほつと胸を撫で下ろしていくと、マデーラは茶葉商人　　アルポイという名らしい　　に歩み寄り、例の何處か企んでいるような笑顔で口を開いた。

「今日はお供じゃなくて客として来たのよ。何か良い茶葉はあるかしら？」

「ほほう。…ああ、じゃあこれはどうかな。最近出回るよいつになつたレサイア産のなんだがね」

(…お供)

その単語に記憶が刺激された。

室内に籠もある、あらゆる産地から集められた茶葉の香り。その香りで何だか気持ちが安らぐのは、おそらくかつて比較的身近にあるものだったからだろう。

一般家庭ではまだ頻繁には口にする物ではないが、まだマデーラの両親が健在だった頃、日に一度は口にしたものだ。

『お帰りなさい、ヴェネフ。疲れたでしょう？　丁度お茶を淹れた所なのよ。あなたも一緒にどうぞ』

(奥様……)

そう、マデーラの母・リエナの優しい笑顔と共にあつた香り。コーディンの供をしたり、あるいは一人で使いに出て帰ると、リエナがマデーラと共にお茶の用意をして迎えてくれたものだ。コーディンとリエナが亡くなつて十日にも満たないというのに、

随分長い事口にしていない気がして、少し切なくなつた。

茶の良し悪しは彼にはよくわからないのだが、それでもその時の茶は美味しかつたと思つ。おそらくもう一度と味わう事はないのだろう。

「そう言えば……」

今まで疑問にも感じていなかつたが、茶葉を取り扱いしていながら、ヴェネフがこの卸商に足を運んだ事は一度もなかつた。てつくり、ユーディンが一手に担つてているのだろうと思っていたのだが。

（もしかして、奥様が管理なさつていたのか？）

仮にも商家の妻だ。可能性はある。

ヴェネフはユーディンと共に行動する事が多かつたので実際の所はわからないが、そうだと仮定すればいろいろと納得出来る。

その買い付けにマデーラがついて行く事もあつただろうし、それならアルポイと顔見知りにもなるだろう。

それにあの茶葉がいいと言つた時の何処か勝ち誇つた顔。間近で買い付けを見ていたのだとすれば、値引き交渉にも少しは自信があるはずだ。

なるほどそういう事だつたのかと一人、ヴェネフが納得していると、彼を他所にマデーラと話し込んでいたアルポイが突然悲鳴のような声をあげた。

「そりや無茶だよ、嬢ちゃん！」

何事かと目を向けると、頭を抱えたアルポイと小首を傾げたマデーラの姿があつた。

「…どうしましたか」

何となく嫌な予感がして、口を挟むとアルポイが困つたような目を向けてきた。

「ええと、ヴェネフ君だつたかね。君も言つてくれないか」

「あの、うちのお嬢様が何か…？」

益々嫌な予感が募る中、当のマデーラが唇を尖らせつゝ説明する。

「『ベネディス産の茶葉をいくつか一緒に買つから、レサイア産の方を半額にまけて頂戴』って言ったのよ」

「…ちなみに、そのベネディス産の茶葉といつのは……」

「あれよ」

マテーラが指差したのは、見るからに売れていなさそな茶葉の袋だった。ただし、値札を見ると量は半分なのにレサイア産の一倍はする代物である。

ヴェネフは頭痛を覚えた。

「…お嬢様、それは無茶です」

「あら、どうして？ なかなか売れない物を買ひ取る代わりに、値引きしやすい方を値引きしてもらうのって悪くないと思つんだけど」「だからって半額といつのはやり過ぎです！」

茶葉は嗜好品で、日常的に口にするものではない。つまり、売れない時は卖れないのだ。卸商とすれば、少しでも利益が出るものをつけ簡単に値下げなど出来るはずもないだろう。

「レサイア産は飲みやすくて比較的売れやすいのは確かだけどね、ベネディス産と違つて知名度が低いから思い切つて下げるのも難しいんだよ」

アルトイはヴェネフが味方になつた事で安心したのか、幾分落ち着きを取り戻した様子で説明してくれる。

「かと言って、ベネディス産の茶葉はスタラの人間には扱いが難しいみたいでね。これがもう少し売れるなら、半額は無理だが少しはまけられるんだけどね……」

「そんなに茶葉によつて扱いが違うんですか？」

ヴェネフの目にはどちらもさして違ひはなさそうに見える。だが、その質問にアルトイとマテーラは同時にとんでもないという顔をした。

「全然違うよ！」

「違うに決まつてるじゃない！」

「そ、そなんですか…」

「そうだよ。元々、茶の文化はベネディスが本場だからね。ここに置いてあるものはほんの一握で、実際はこれの数倍はある茶葉を時と場合で配合比率を変えて淹れる物なんだ。当然、金もかかるからそこまでやるのは王侯貴族くらいなものだけだね」

「レサイアの方はそこまで加工されてないのよ。誰にでも簡単に淹れられるけど、その分味は単調みたい」

アルポイのみならず、マテーラにまで漬物^{うなぐ}をかまされて、ヴェネフは素直に白旗を揚げた。市場ではあれは何これは何、だったのに今ではまるで立場が逆である。

「わ、わかりました。あの、とにかくお嬢様

「何よ？」

「扱いが難しい茶葉を買って、その、大丈夫なんですか……？」

正直な話、マテーラが厨房に立つ姿が想像出来ない。おやぢくりエナが淹れる横で見てはいたのだろうが、知識はあっても実際淹れられるかどうかは別問題だろう。

その不安が正直に表情に出ていたのだろう。マテーラの目が釣りあがつた。

「失礼ね！……ああ、そうだわ」

そのまま怒り狂うかと思いつか、唐突にマテーラは何かを思いついたように手を叩いた。

「ねえ、アルポイさん。ベネディスのお茶が売りやすくなればいいんでしよう？」

「へ？……ああ、そうなれば品質的にベネディスの方がずっと上だから、買い手も増えると思うが……」

でも、どうやって。

視線で尋ねられたマテーラは、ふふんと胸を反らした。

「本式に淹れようとするから難しいのよ。それ単品で美味しく飲めればいいんだわ」

「し、しかしだね、いろいろ混ぜるから補い合つて飲めるものにないんだよ。これだけを普通に淹れると不味くて飲めたものじゃ……」

アルポイが言い募つた瞬間、マデーラの瞳が待つてましたとばかりにきらりと光つた。 ようにヴェネフには見えた。

こういう時、大抵マデーラはろくな事を考えていない。 そして案の定、マデーラは挑むように言い放つた。

「じゃあ、もしその方法を教えたたら安くしてくれる?」

「…………」
しゅんしゅんと、湯が沸く音だけが響いている。

ぎこちない沈黙が漂う狭い店内に、男達だけが取り残されていた。というのも、店内の奥にある住居部にマデーラが籠もり、準備が出来るまで見てはならないと店主のアルトイまで店間に追いやったからだ。

「…………あ、あの…………」

「…………なんだね」

「その、済みません……うちのお嬢様が…………」

居たたまれずにヴェネフが声をかければ、アルトイは何処か同情するような視線を彼に向けた。

「ああ、気にしなくていいよ。……今日はお密も切れたようだしね」「そう言つていただけとありがたいです」

「いやいや。嬢ちゃんがどんな仕掛けをしてくるのか、実際ちょっと楽しみでもあるしね。やけに自信があるようだつたが……。そういや、最近姿を見かけないが、リエナさんは元気かい？ いつもならそろそろ仕入れに来る頃なんだが」

アルトイの何処か心配そうな言葉に思い出す。そうだ、彼はまだマデーラの両親の訃報を知らないのだ。

「それが、旦那様と奥様は…………」

二人の死を知ると、アルトイはさほど大きくはない目を極限まで見開いた。

「お一人が、亡くなつた……だつて？」

「はい、先日海で…………」

「そんな……ですか、そうだつたのか…………」

がつくつと肩を落とす姿からは、心から彼等の死を悼む気持ちが

伝わってくる。田じりにはうつすらと涙が光っていた。

「…奥様が茶葉の買い付けをなさっていたんですね」

「ああ…コーディンさんとリエナさんがこの土地に来てからの付き合いだよ。リエナさんが元々ベネディスの生まれだそうでね…うちが一番茶葉の揃いがいいと、『 McConnell にしてくれたんだ」

「そうだったんですね…」

アルポイの言葉を借りるなら、リエナは茶文化の本場の生まれだつたという事だ。

なるほど、それなら茶葉の仕入れを一手に受けるのも当然だと、ヴェネフは納得した。

田頃何気なく口にしていたあのお茶も、もしかするとこのスタラではとても貴重な、本場仕込みの一杯だったのだ。

「五、六歳くらいまでは嬢ちゃんも買い付けと一緒について来てね。一緒に来なくなつた時に君の話を聞いたよ」

「え？ 私の、ですか？」

「うん、リエナさんには。『すっかり懐いてしまって、誘つても来なくなつた』って言つてたかな。兄代わりの人出来て嬉しいんだろ？ つって笑つていたよ」

「は、はあ…」

取りあえず初対面で『あの』と言われた理由は判明した。

マデーラが五、六歳なら確かにヴェネフが父の遺言を胸にコーディンの元を訪れた頃だ。マデーラの口から伝わった話ではないという事に安堵しつつ、ふと思つ。

…ひょつとしてマデーラの世間知らずは、自分にも原因があるのだろうか。

（いや… そんなまさか……）

心の内で嫌な汗を流していると、アルポイが心配そうに尋ねてきた。

「ところで、両親が亡くなつたって事だが、嬢ちゃんに身よりは…？」

「それが…奥様にはどなたもいらっしゃらないとの話でした。旦那様のご兄弟はいるようなのですが、音信普通で今何處にいらっしゃるか、そもそも生きているのかもわからなくて……」

「そうか…それでもあんなに元気そうに振舞つて……」

「ぐすり、ヒアルトイは涙ぐむ。

おそらくマデーラの前向きな明るさを、悲しみを堪えてのものだと思つたのだろう。

（…多分違いますが、否定するのも野暮でしちゃうね）

ヴェネフはよく出来た使用人だったので、あえてアルトイの誤解を解かずにしておいた。

マデーラが両親の死を悲しんでいない訳ではないと思つ。実際、知らせを受けて半日は部屋から出て来なかつた。

食事も摂らずに泣き通し泣いて 真っ赤に目を泣き腫らしながらも表に出てきたマデーラは、開口一番にこいつ言つた。

『お腹空いたわ、ヴェネフ』

ヴェネフが慌てて用意した簡単な食事を黙々と食べ、お腹が満ち足りる頃には普段のマデーラになつていた。

おそらく、だが。

マデーラは両親の死を悲しみ続けるよりも、自分がまず生きる事を選んだのではないかと思つ。

ヴェネフが恩人である彼等の死をただ嘆くより、一人残されたマデーラを支える為、『使用人』としての自分を維持する事を選んだよつに。

流れ的に何処となく、しんみりとした空気が流れた。

『両親の突然の死を前に、涙を堪えて明るく振舞う幼い少女』といつ図式は、あまりにも健気過ぎてマデーラには似合わない。

何となく騙しているような居たたまれない気持ちになり、ヴェネフは話題を探した。

「あの…私は茶葉に関しては知識不足なのですが、ベネディス産の茶葉とは、それほど飲みづらいものなのですか？」

ふと思いついての質問に、アルポイは我に返つたように瞬きした。

「あ、ああ…まあ…簡単に言つと、香りの問題なんだがね」

「香り、ですか？」

アルポイの言葉に、リエナが淹れてくれた茶の事を思い出す。豊かで芳しい、何処かでほつとするような香りだったと思つ。てつきり、茶葉は淹れればどれもあのような香りがするとばかり思つていたのだが。

「そうだよ。ベネディスの茶というのは、味より香りを重視する淹れ方だそうでね。産地によつても違うんだが、それだけじゃなくてわざわざ香りをつけたものまであるんだ」

言いながらアルポイはベネディス産の茶葉の袋から茶葉を少しずつ小皿に取り出すと、それをヴェネフへ手渡した。

視線に促され、それぞれ茶葉の香りを確かめると、確かにどれも異なる香りがした。一種類を比べるとさほど違いは感じないのだが、三種類になるとより違いがはつきりする。

意識しているからより感じ取りやすいのだろうが、正直驚いた。

「確かに…」

「なもんで、普通に淹れると香りはあるのに味が単調という、何とも不調和な状態になつたり、味はしても香りと香りがぶつかり合つたりするんだ。だから素人には難しいんだよ」

「なるほど。じゃあ…味が単調なら、たとえば砂糖とかで味をつけみれば……？」

「まあ、一般的にはそれが一番簡単だね。味の単調さならそれで多少は誤魔化せる。だが、お嬢ちゃんのあの様子だとそんな単純な方法ではなさそうだ」

「ですかね…？」

アルポイの何処となく楽しげな様子に対し、ヴェネフは益々不安になつた。

マテーラがどんな妙案を持つているのかわからないが、普段の様子を考えるに、アルトイほど期待は出来そうになかった。

何しろ今まで覚えている限りでは、一度もマテーラの手料理など拌んだ事も口にした事もないのだ。

ただでさえ勝手わからぬ他人の厨房だ。うつかり薬缶やかんでも倒して火傷やけどでもするのではないか、と心配でたまらない。一応、嫁入り前の大変なお嬢様である。

やがてマテーラが厨房から戻ってきた頃には、ヴェネフの胃は穴が空く寸前だつた。

「お待たせ……って、どうしたのヴェネフ。顔色があまり良くないけど……寒いの？」

にも関わらず、当のマテーラと言えば、胃に穴あなが開きそうな心労と戦い、顔色が冴えない、ヴェネフを一瞥いちべつしてのこの一言だ。

使用人の心、主人知らず。

流石によく出来た使用人である彼も、思わず心の底からため息をついた。

「トン、と小さな音を立てて茶器が置かれた。アルポイとヴェネフ、そしてマデーラの三人分のそれは、寒い室内に温かそうな湯気と共に芳香を漂わせる。

「さ、どうぞ？」

軽く首を傾げながら、自信ありげにマデーラが勧める。
 「どれ……。うん、血は争えないもんだね。香りが良く出ている」カップを持ち上げ、香りを確かめると、アルポイが満足そうに目を細めた。どうやらヴェネフの心配は杞憂に終わってくれたらしい。その指に火傷などがない事をさりげなく確かめ、倣うようにカップを持ち上げる。

（…おお…あ、暖かい……！）

ふわり、とカップから湯気が漂う。両手で触れた器の表面から熱が伝わり、無意識にその口元が僅かに緩んだ。

いくら外よりは暖かいと言えども、住居部ほど暖かさを重視されていらない店内だ。

先程からじわじわと手足の先から滲んで来る寒さに辟易していたヴェネフには、暖かいというだけで非常に魅惑的な飲み物である。

思わずそのまま器に頬ずりしそうになるのを理性で耐える。

寒さに弱い事を知っているマデーラだけでなく、事情を知らないアルポイが横にいる状況でそのような事をすれば、ヴェネフが恥ずかしいだけでなく、主人であるマデーラの恥になる。

すでに着こむだけ着こんだ姿を晒しているので、今さらかもしないが、それはそれである。

余程壊滅的な味でない限り、口にすればさぞ身体の内から温まる事だろう。想像するだけで幸せになれる。我ながら安いと思うが、本当に寒さだけはどうしようもないのだ。

けれど、すぐに口にはせずにヴェネフもまづ香りを楽しむ事にし

た。先程、アルポイが言っていた事を思い出したからだ。

ベネディスの茶文化は、味よりも香りを重視している、と。

アルポイが口にする前に香りを確かめたのも、おそらくそうした事が理由だらうし、リエナからは特に言われた事はないが、そうするのが一種の作法なのかも知れない。ならばそれに従うべきだらう。よく出来た使用人には、時としてそうしたやせ我慢、もとい、自制が必要なのだ。

湯気と共に届くのは、甘く、それでいて清々しさのある果実めいた芳香。元々茶葉につけられていた香りなのかも知れないが、先程の茶葉を直接嗅いだものとはまったく違う気がする。

茶の知識などないが、確かにその香りは心地よく、かつて口にしたリエナの淹れた茶を彷彿^{ほつぶつ}とさせる。

「どう? ヴェネフ」

マデーラの期待を込めた視線を受け止め、ヴェネフは頷いた。

「はい、よい香りだと思います。正直、お嬢様に茶が淹れられるとは思いもしませんでしたが、見事だと思いますよ」

ヴェネフの正直な感想に少々複雑な顔をしたもの、それが褒め言葉だつた為か、マデーラは怒りはしなかつた。すぐに表情を改めると挑むようにアルポイに向き直る。

「でも、問題は味よね? アルポイさん、試してみて」

確かに今回は香りではなく味が問題だ。『素人でも簡単で、ベネディス産の茶葉単品で美味しく飲め』なれば、意味がない。

「ああ、そうだね。では頂こう」

頷いてアルポイが器を傾けた。

まず一口含み、味を確かめるように味わう。その様子をいささか緊張した面持ちでマデーラが見つめる。自信ありげな様子だったが、多少は虚勢もあつたようだ。

マデーラが手ずからいれた茶の味も気になつたものの、アルポイから一体どんな感想が返つてくるのかがともかく気になり、ヴェネフも思わずじつと反応を見守つた。

やがて、一人の前で最後まで飲み干したアルポイが驚いたように呴いた。

「…美味しい」

その言葉にマデーラの顔がぱつと輝いた。

「美味しい？ 本当に？ 合格？」

「…本当に驚いた。美味しいよ。ベネディス産の茶葉独特の癖が気にならないし、微かに甘みもある。そう言えば香りも本来の物と少し違つたような…何か、入れたのかい？」

アルポイの言葉に釣られたように、ヴェネフも持つたままの茶に口をつけた。

熱いそれに舌を焼きかけながらも、含んだ途端に口内に広がったのは熱と香り、そして…。

「これは…」

口を押さえて呴いたヴェネフに、マデーラがまるで悪戯でも見つかつたような顔をした。

アルポイの言葉は嘘ではなく、それは確かに美味しいと言えるものだった。

普段飲みつけていないので、癖が気にならないというのは良くわからなかつたものの、微かな甘みがあるのはわかる。だが、それは砂糖の類ではない。

あまりに微かで味という味ではないのでアルポイにはわからなかつたようだが、ヴェネフにはそれが何かわかつた。

何しろそれは彼の好物で、しかもつい先程目にしたばかりで記憶に新しいのだから。

「『冬林檎』、ですね？ お嬢様」

北方に属するスタラの冬は厳しく、国土の大半が凍りつく。その寒い時期でも一定の日照条件を有した、極限られた土地で採れる赤い果実。

それは通常の林檎より香り高く、甘みが強い。その代わり、価格的に割高。

そう、マテーラが先程、果物売りの呼び込みに引っかかった揚句に購入したものだ。

「林檎だつて？」

「あー、もう。もつと悩んでくれると思ったのに！」
予想外だつたのか、田を丸くするアルポイの横で、マテーラが少し悔しげに唇を尖らせる。だがその言葉 자체がヴェネフの言葉を肯定していた。

「果汁を入れたのか？　いや…それならこんなに水色が綺麗なはずがないし……」

腑に落ちないのか、アルポイがぶつぶつと呟くのに、マテーラが軽く首を傾げて問いかける。

「結局、合格つて事でいいの？　合格なら、種明かしするけど」
心なしか確認する言葉が楽しげなのは、おそらく『合格』の自信があるからで、本当は話したくて堪らないのだらう。その程度なら表情を見ずともわかる。

それはアルポイにも伝わつたのだろう。それ以前にどうやってこの茶を淹れたのか、気になつて仕方がなかつたのかもしれないが、アルポイはあつさりと『合格』を告げ、マテーラに種明かしを求めた。

「一体どうやってこの茶を淹れたんだい？」

「簡単な事よ。…とは言つても、わたしも母様に教えてもらつた方法なんだけど」

淹れたのはマテーラでも、方法自体は自力ではないからか、少しだけ気恥ずかしそうな顔で頬をく。

「実際に見た方が早いと思うから、ちょっと一人ともこいつに来てくれる？」

そう言つてマテーラが一人を手招きしたのは、先程までマテーラがこもつていた厨房への扉だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7972d/>

仰せのままに、御主人様

2011年8月4日03時10分発行